

ちばだい プレス

CHIBADAI
PRESS

千葉大学
広報誌

2024

VOL.

65

AUTUMN



特集

千葉大スタートアップ・ラボの取り組み

アントレプレナーシップ教育を推進し、学生や研究者のスタートアップ創出を支援

千葉大学 OBOGインタビュー

研究紹介 -InfoGraphics- CHIBADAI NEXT より

CHIBA UNIVERSITY

千葉大スタートアップ・ラボの

アントレプレナーシップ教育を推進し、学生や研究者のスタートアップ創出を支援

片桐 大輔 (かたぎり・だいすけ)

千葉大スタートアップ・ラボ責任者。千葉大学大学院国際学術研究院教授。千葉大学大学院医学薬学博士課程修了。日本学術振興会特別研究員として薬学研究に従事したのち、NEDOフェローを経て大学発スタートアップを起業。経営を実践。その後、大学系VC・ベンチャーキャピタリストを経て、2022年1月より千葉大学IMOに参画し、スタートアップ・ラボを設置。2024年4月より現職。第12回(平成26年度)産学官連携功労者表彰 経済産業大臣賞。



◆ 大学から自発的なイノベーションを生み出すために設置

かつては研究と教育がメインミッションだった国立大学ですが、近年では研究成果を社会実装し、課題解決に貢献する役割が求められています。こうした要請に応えるため、千葉大学では2020年4月に「学術研究・イノベーション推進機構」(IMO=Academic Research & Innovation Management Organization)を西千葉キャンパスに設置しました。

その後、2022年11月に内閣府から発表された「スタートアップ育成5か年計画」で、大学はイノベーションの源泉と表現され、研究成果をシーズとしたベンチャー創出への期待が示されました。これを受け、スタートアップ支援やアントレプレナーシップ教育を推進する組織としてIMO内に設置されたのが、私たち「千葉大スタートアップ・ラボ」です。

千葉大スタートアップ・ラボは、責任者の私のほか、URA(イノベーション・マネジメント研究員)が5名、さらには今年からは文部科学省の大学発新産業創出基金事業の予算を活用して4名のEIR(客員起業家)が参画し、現体制となりました。ただ、これでもマンパワーは足りないため、外部の専門家や地域企業の経営者などにアドバイザーをお願いしています。

◆ どのような職種でもアントレプレナーシップが必須の時代へ

具体的な取り組みは大きく分けて、「アントレプレナーシップ教育」「スタートアップ支援」「スタートアップのエコシステムの形成」の3つです。

取り組み

アップ創出を支援

1つめのアントレプレナーシップ教育は、大学での教育がメインではあるものの、大学入学前からの助走が必要との考えから、これまで培った教育知見を小中高生にも提供する試みが進んでいます。その一例が、千葉県内に在学・在住する高校生を対象とした起業体験プログラム「TOKKA(トッカ)」。起業に関心を持つ高校生は、インターネットなどを通じて様々な知識をすでに得ていますが、アントレプレナーシップの本質は行動です。そこで、彼らのアイデアをブラッシュアップして、最終的にプロトタイプまで伴走する趣旨でTOKKAを実施しました。こうした取り組みで得られた知見は県内の高等学校で活かされ、アントレプレナーシップ教育の推進につながっています。

実際のスタートアップへとつながっていく千葉大生へのアントレプレナーシップ教育では、起業に関する知識を得る授業「スタートアップ概論」や、概論をベースとしたトレーニングプログラムを実施しています。これからの時代、アントレプレナーシップやスタートアップに関する知識は、起業する人だけでなく、広く社会人にとっても必要になるのは確実です。授業では、企業経営者やベンチャーキャピタリストなどを講師に招き、セッション方式の講義を行うことで、これからの時代に活躍できる人材を育成するという観点で講義を実施しています。

また、アントレプレナーシップ教育の一環として、千葉大学で実施している学内GAPファンド「なのはなコンペ」や首都圏の大学が参画するスタートアッププラットフォーム「GTIE」のプログラムなどを学生や研究者に提供し、アントレプレナーシップを「体験」する場を整えています。こうした取り組みを通じて起業に対する学生の心理的なハードルは下がっていると感じますが、私が教えられている受講者はまだまだ少なく、年間でも100名程度です。千葉大学には学部と大学院を合わせると1万3,000人ほどの学生がいるので、その1割程度まで数を増やしたいと考えています。

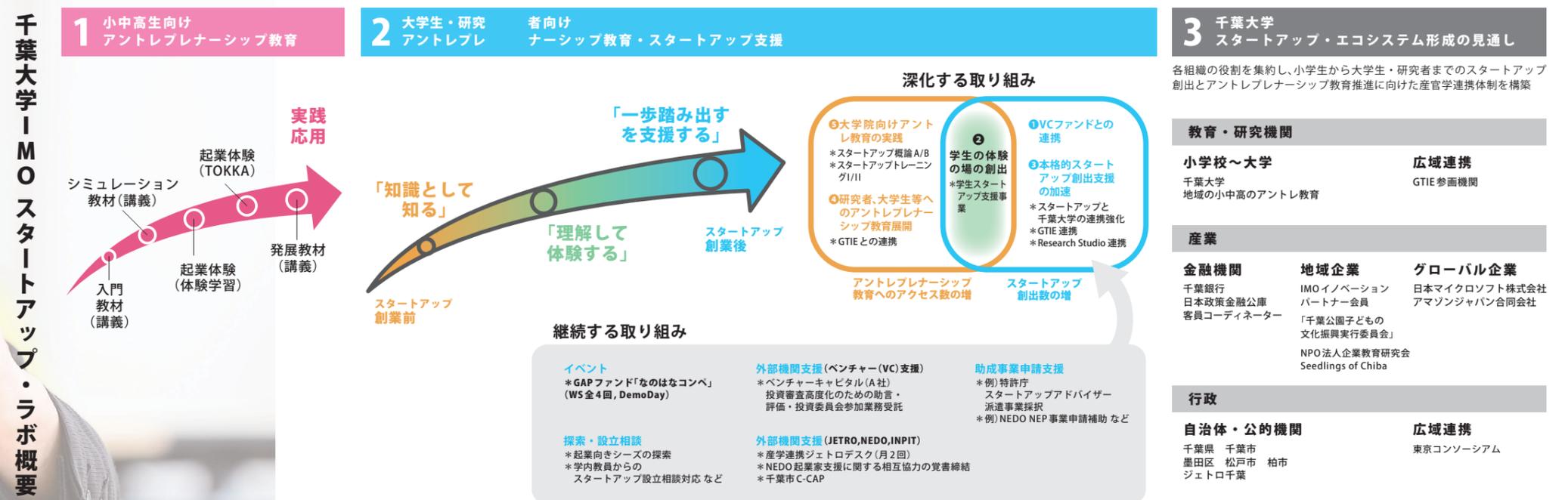
◆ 人生の主体者になるためのアントレプレナーシップマインド

2つめのスタートアップ支援は、学生や研究者が起業を目指す際、様々なフェーズで適切なサポートを提供するものとなっています。起業前後の登記や定款策定といった行政手続きに関する相談はもちろん、そもそも、その商売の顧客は誰か、顧客価値は何かといったビジネスモデルに関する相談、また、事業計画や資本政策に関する相談など、幅広く対応しています。

支援は起業前だけではなく、起業後も継続して行っています。事業計画を見直ししたいときに壁打ち相手にもなりますし、資金調達(投資・融資)のニーズが高まっている場合は、連携している金融機関やベンチャーキャピタルとの出会いも創出します。

こうした教育や支援を通して最終的に目指すのが、3つめの項目、スタートアップのエコシステムの形成です。アントレプレナーシップの定着やスタートアップの活性化のためには、国や自治体、金融機関、民間企業といった様々なプレーヤーが連携することが肝要ですが、大学はそのまとめ役、ハブとしての機能が求められています。大学はアカデミアとして社会の信頼もあり、起業シーズとなる研究成果も豊富です。各大学がイノベーションのハブとなり、さらに大学同士が連携していくことで、複合的な仕組みとしてスタートアップを加速させていく、これが私たちの目指しているエコシステムの姿です。

アントレプレナーシップマインドを持つことは、起業することだけがゴールではありません。自らがオーナーシップを持つことは、研究の道に進む場合はもちろん、会社選びや転職も含め人生のあらゆる場面で役に立ちます。起業に関心がある方もない方も、ぜひ一度、千葉大スタートアップ・ラボにお立ち寄りください。



EIR 客員起業家 に聞く！

～千葉大スタートアップ・ラボの支援事例①～

リンパ浮腫の画期的な診断法を 当事者として自ら事業化したい

起業を目指す人材が仕事を続けながらスタートアップに挑戦できるEIR制度。千葉大学では2024年に導入されました。挑戦を続ける4名の中から大学院工学研究院の小川良磨特任助教の事例を紹介します。

— EIR制度について教えてください

片桐 EIRは日本語では客員起業家と呼ばれます。起業を志す人材が会社や大学などの組織に一定期間所属して起業を目指す制度です。千葉大学では一期生として4名を採用しました。

小川 私は、千葉大学大学院工学研究院特任助教、日本学術振興会の特別研究員という肩書がありますが、並行して大学での研究成果を活かした起業を考えており、EIR制度を活用して事業化に挑戦しているところです。

— 小川さんが事業化しようとしている研究内容を教えてください

小川 私の研究テーマは、電気インピーダンストモグラフィ(EIT)法という生体可視化技術を使ったリンパ浮腫診断です。リンパ浮腫は主にがん治療が原因でむくみが起こる症状で、痛みはないものの、発症してリンパの免疫機能が低下すると細菌感染などのリスクがあります。近年の研究成果により、早期発見できれば治療で抑えられる可能性が示唆されていますが、従来はCTやMRIといった患者さんに身体的な負担のかかる診断法しかなく、早期発見自体が難しいという課題がありました。私が研究してきた生体可視化技術は、体脂肪計や体組成計と同じように、微弱な電気を流して体内の状態を可視化する仕組みで、簡便かつ体の負担もない診断が可能となります。

— 事業化しようと思ったきっかけは何ですか

小川 研究を始めたのは、学部4年で武居昌宏研究室に所属したときです。学部卒業後に1年間、英国留学で再生医療におけるEIT法の応用について学び、帰国して武居研究室に戻ったタイミングで起業を考え始めました。リンパ浮腫の患者さんに何度もヒアリングするうちに、自分も当事者の一員だと思いが生まれたのが起業しようと思った理由です。

片桐 小川さんの英国留学は工学分野のはずが、当初の予定とは異なり再生医療の研究をすることになった経緯がありました。通常なら途方に暮れるところですが、小川さんはピンチをチャンスに変え、工学での研究を医療に活かす道を見出しました。このバイタリティは起業家そのものだと思います。

— 起業に向けた経緯について教えてください

小川 修士の期間からJST(科学技術振興機構)の「START」というプロジェクトに応募し、最初の2年間は採択されなかったのですが、博士号を取得した2022年のタイミングで採択となりました。このプロジェクトは最終的な起業が達成目標に設定されているため、必ず社会実装をする必要があります。

片桐 千葉大スタートアップ・ラボが設立されたのがちょうどその時期でしたね。JST事業の場合、事業期間のあいだはプロジェクトに対しては資金が出ますが、起業後の経営について、今から考えておく必要があります。小川さんは当事者として自ら経営したいという思いが強かったので、EIR制度はまさに小川さんのための制度ともいえるかもしれませんね。

小川 千葉大学でEIR制度が導入されたのは今年ですが、2022年当時片桐先生には起業家やベンチャーキャピタリストの視点で多くのアドバイスをいただきお世話になっています。

— 特に助かった支援はありますか

小川 医療に関係する事業は法的にクリアすべき点が多々ありますが、そうした面で専門的なアドバイスをもらえる方を紹介していただけたことが助かりました。

片桐 千葉大スタートアップ・ラボが連携している千葉大学IMO Business and Technology advisorの中から大手グローバル医療機器メーカーに勤務されている方の支援を受け、アドバイスをいただきました。アドバイザーについては、単に業種が近いから相談するというのではなく、事業への理解度やレベル感なども考慮した上で、千葉大スタートアップ・ラボでおつなぎするようにしています。

— EIRの立場から、今後、千葉大スタートアップ・ラボに期待することを聞かせてください

小川 EIRは起業を目指す人にとっては有意義な制度ですが、起業に興味がある人の中には、社長ではなく参謀のような補佐をするタイプもいると思います。私自身、右腕となってくれる人を探しているため、千葉大スタートアップ・ラボがそういった人材をつなぐ役割を担ってくると嬉しいです。

片桐 適材で力を発揮する場所はいくらかでもあると私も思います。千葉大スタートアップ・ラボは、アントレプレナーシップマインドを持った人材が滞留するエコシステムのハブになることを目指しているため、小川さんの期待に応えられる組織になっていけるようにますます頑張ります。EIRだけでなく、スタートアップに興味がある全ての学生や研究者を支援していくつもりなので、今後ともご期待ください。

小川 良磨(おがわりょうま)

千葉大学EIR。千葉大学大学院工学研究院特任助教。日本学術振興会・特別研究員-PD。千葉大学大学院融合理工学府博士後期課程修了。「医療×工学」をキーワードとした研究を軸に社会実装を推進し、生体可視化技術を使ったリンパ浮腫診断の医療機器を開発中、事業化に挑む。



学生起業家に聞く！

～千葉大スタートアップ・ラボの支援事例②～

千葉大学在学中に起業した学生起業家2名のスタートアップ事例を紹介します。立ち上げた事業の内容や起業を決意したきっかけ、千葉大スタートアップ・ラボから受けた支援などについて伺いました。

株式会社 MamaWell

代表取締役 **関 まりか** さん
千葉大学 大学院看護学研究科 博士後期課程

株式会社 yue

代表取締役 **大澤 秀征** さん
千葉大学 工学部 総合工学科 都市環境システムコース

起業後、事業拡大に向けた 相談にのっていただきました

株式会社MamaWellでは、助産師とデジタルヘルス技術を掛け合わせて、妊婦の就業継続と健康的な妊娠生活の両立を支援するサービスを提供しています。私自身が助産師として500名以上の出産に立ち会った中で、妊娠合併症に苦しむ多くの妊婦を見てきました。大学院で「妊婦の身体活動」をテーマに研究をしましたが、自分が研究者であり続けても社会には正しい知識が広まらない点に限界を感じ、自ら事業を起こすことを決意しました。当時はスタートアップ・ラボの設立前でしたが、たまたまそのタイミングでIMOが主催する「なのはなコンペ」の存在を知り、IMOから申請内容のブラッシュアップなどの支援をいただいたことで、コンペを通過することができました。スタートアップ・ラボからの直接の支援をいただいたのは、MamaWellの創業後です。新規取引先になり得る顧客候補に関する相談への対応や、事業拡大時には資金調達を避けて通れないので、エクイティ(投資)やデット(借入)による調達の相談にもっていただきました。最初の面談では、事業化について考えが甘い部分を指摘されたのですが、現在はそのときの経験も活かし、この度のシード期の資金調達にもつながっています。

株式会社yueは、サウナの企画から設計、施工、運営までをプロデュースする会社として起業し、現在は自店舗の開発運営にまで事業を拡大しています。大学に入るまでは建築士を目指していましたが、実際に建築を学ぶようになって自分の適性を見つめ直し、建築という切り口で好きなものを形にする起業家へと方向転換しました。その好きなものが私にとってはサウナです。自費でつくったサウナ軽トラで全国のサウナ施設を回るうちに、東京のある温泉施設のオーナーと知り合い、サウナをプロデュースしたのを機に個人事業主になりました。2年ほど事業を経験した後、自店舗を持つためにyueの立ち上げを決意し、相談できる人を探したところ、たどり着いたのがスタートアップ・ラボでした。特にありがたかったのは資金調達の支援です。ベンチャーキャピタルの視点では、どのような資金計画が必要なのかを教えてくださいましたし、千葉大スタートアップ・ラボと連携している金融機関ともつないでいただき、スタートアップ相談をすることができました。おかげで資金調達にめどがつき、夢だった自分の店舗が現実になるうとしています。事業にはさまざまなビジネスフェーズがあるので、今後も相談にのっていただきたいと思います。また、千葉大学OBの起業家が交流できるような場づくりにも期待しています。

スタートアップ・ラボは、 事業の各フェーズで 相談できる存在です



地域住民のニーズを汲み 遊覧船を湖上の公園に

——仕事をするうえでのモットーを教えてください。

川西 私はモビリティデザインだけでなく、各種施設も含めた幅広い設計を行っています。これらを広くまちづくりと捉えたときに、土地を知り、住民の意見を聞き、何を求めているのかに耳を澄ませることを重視しています。これはつまり、住民や事業者など、関わる人全てに自分ごととして考えてほしいということ。例えば、鉄道について考えてみましょう。事業側はどうしても利益や保守管理といった面を重視しがちですが、利用者が求める空間や機能が必ずしもそれに合致しているとは限りません。私たち設

計者・デザイナーは、快適なモビリティデザインを通して、事業者と利用者という異なる立場をつなぐ「翻訳家」のような役割だという意識で仕事に取り組んでいます。

——これまでの実績で印象に残っているものを教えてください。

川西 「えちごトキめきリゾート雪月花」は、初めて鉄道車両のトータルデザインを担当したという点で思い出深い仕事です。近年の観光列車は動くホテルとも言われますが、この雪月花は最大級の展望と上質な料理が高評価をいただいています。ある講演会で、雪月花について話す機会があったのですが、その講演をお聞きになったJR西日本の車両部長が千葉大学のOBで、そのご縁で「WEST EXPRESS 銀河」や「やくも」といった仕事にもつながっていったの

で、より一層印象に残っています。また、湖に浮かぶ公園を目指した芦ノ湖の「箱根遊覧船SORAKAZE」は、観光客のみならず地元住民の憩いの場としても手応えを感じています。

——箱根遊覧船SORAKAZEのデザインのこだわりは？

川西 箱根遊覧船SORAKAZEを運営する富士急行グループと私自身も、箱根では初めての仕事でしたので、より地域の声を丁寧に聞いてデザインすることが重要だと考えました。まずは、環境面に配慮しました。船内には芝生スペースを設けているのですが、芦ノ湖はカルデラ湖で水質がきれいなので、プラスチックごみが出ないよう人工芝ではなく天然芝にこだわりました。また、芦ノ湖周辺は伝統的な観光地として有名で、

地元住民が遊べる場が少ないとの声があったため、デッキにブランコを設置するなど、家族が遊覧しながら遊べるような湖上の公園となるように設計しました。

モノづくりを学びたいとの 思いで建築分野に進学

——最初にデザインを志したきっかけは？

川西 高校時代に鉄道雑誌で水戸岡鋭治（※）さんの記事を見たことです。もともと子どものころから電車や自動車が好きでしたが、モビリティデザインで旅の文化も変えられるという水戸岡さんの言葉を知り、みんなが使う公共交通機関のデザインに関わりたいと思いました。モビリティデザインを学ぶにはどうすればいいかを調べたところ、建築分野ならモノづくりについてひ

JR西日本の「WEST EXPRESS 銀河」や

芦ノ湖の「箱根遊覧船 SORAKAZE」などモビリティをはじめ

様々な建築物のデザイナーとして活躍する川西康之さん。

原点となった海外生活や設計のこだわり、

千葉大生に向けたメッセージなどを語っていただきました。

川西 康之（かわにし・やすゆき）

株式会社イチバンセン代表取締役。千葉大学工学部建築学科卒業、同大学院自然科学研究科デザイン科学（建築系）博士前期課程修了後、デンマーク王立芸術アカデミー建築学科招待学生。オランダの建築設計事務所やフランス国鉄交通拠点整備研究所を経て、2014年にイチバンセンを設立。公共交通機関や駅舎などのデザイン多数。



32

デザイナーは「翻訳家」 使う人の気持ちに寄り添い快適なモビリティデザインを目指す

建築家・デザイナー／株式会社イチバンセン 代表取締役

川西 康之 さん

ととおりカバーできることを知り、建築が学べる大学へ行こうと考えました。当時、一人暮らしにあこがれがあったこともあり、地元の奈良を出ることを前提に、経済的な負担が少ない国立大学で建築やデザインを幅広く学べる進学先を探した結果、行きついたのが千葉大学工学部建築学科でした。

※水戸岡鋭治：工業デザイナー。ドーンデザイン研究所代表取締役。代表作にJR九州の「ななつ星in九州」車両など。

——大学院修了後はデンマークに行かれましたね。

川西 在学中に旅をしたデンマークのコペンハーゲンに魅せられ、ここに住みたいと思ったのがきっかけです。現・千葉大学名誉教授の北原理雄さんが当時、デンマーク王立アカデミーの招待教授だったので

紹介状を書いていただき、大学院修了後に招待学生として学ぶことになりました。私がデンマークを好きになった理由は、人の暮らしや家族の営みを大切にす文化があったからです。インテリアや食器などの生活を豊かにするもので世界有数のブランドがあるのもその表れだと思いますし、街を歩いても温かみを感じることができます。居心地の良さや快適さはモビリティデザインでも重要な点なので、デンマークで学んだことは現在の私の原点の一つになっています。

さらに視野を広げて 基礎力を活かしてほしい

——その後も海外で実績を積まれましたね。

川西 大好きなデンマークで就職したかっ

たのですが、当時のデンマークは失業率が高かったため、オランダに移ってアムステルダム建築事務所3年ほど修行し、さらにフランス国鉄の交通拠点整備研究所で東ヨーロッパ線開業事業に携わりました。私はこのとき、シャンパーニュ地方の路線開発を担当しましたが、地域に誇りを持った住民たちと納得がいくまで話し合うという体験をしました。私が仕事をする際、関わる人全てに、自分ごととして考えてほしいと考えるのは、このときの経験があるからです。

——最後に千葉大生へのメッセージをお願いします。

川西 デザインや設計だけでなく、また仕事であろうと、学問であろうと、自分の目で見て納得することは、視野を広げるう

えでも重要です。私は千葉大学の工学部で非常勤講師を務めたこともありますが、千葉大学の学生はしっかりと基礎を身に付けている印象を受けました。留学も含めてさらに視野を広げていけばその基礎力をより活かせると思います。チャレンジする皆さんに期待しています。



箱根に子どもたちの遊び場が少ないという声を受け、湖上の公園として設計された箱根遊覧船SORAKAZE。地元住民から好評で、40分の遊覧時間があったという間だという声も。

千葉大学の研究を発信する「CHIBADAI NEXT」より、研究を「絵」と「簡単なキーワード」で視覚的に表現する「インフォグラフィック」をお届けします！



研究 / 人生におけるモットー
結局、感覚を身に付けることが大切。才能とは、同じ情熱、気力、モチベーションを持続することである(羽生善治)。

最近関心を持っているテーマ
乾燥地の農業。食用米、酒米の品質の推定。人工知能。

趣味 / 休日の過ごし方など
散歩、探検(行ったこと、歩いたことがないところを散歩)。食器・調理器具を見る。

ドローンやセンサーが農業でも大活躍していることをご存じでしょうか？最先端のテクノロジーが農業の課題を次々と改善している現場から、大学院園芸学研究院の濱 侃先生の研究を紹介します。

千葉大学 大学院園芸学研究院 助教
はま あきら
濱 侃

今生きている世界(自然景観など)がなんでそうなっているのか説明できるようになりたいと思い地理学を学び始めました。現在は画像解析などのセンシング技術を基盤に、自然環境から農業まで様々なものを対象とした、農業気象学、スマート農業、地理学に関わる研究を行っています。



学生へのメッセージ

自分や現状への不満、漠然とした不安を感じている学生はたくさんいると思います。私は「どんな道を選ぶかではなく、選んだ道でどれだけやるか」という言葉が好きです。選んだ道で頑張ることができれば、自然と魅力的な人材になっています。きっと将来も明るくなります。

千葉大学と社会をつなぐ、研究の魅力発信オウンドメディア

日本語版

英語版

AWARD

大栗真宗 教授・清野宏 卓越教授が日本学士院賞を受賞しました

本学先進科学センターの大栗真宗教授と未来医療教育研究機構・医学部附属病院ヒト粘膜ワクチン学部門の清野宏卓越教授が、学術上特につくられた論文・著書その他の研究業績を顕彰している日本学士院賞を受賞しました。7月8日には、東京・上野の日本学士院会館にて、天皇皇后両陛下ご臨席のもと、第114回授賞式が挙行されました。

大栗 真宗 教授
【研究題目】 重力レンズ効果を用いた宇宙論研究の開拓推進(共同研究) 国立天文台ハイ観測所教授・所長の宮崎聡氏との共同研究

清野 宏 卓越教授
【研究題目】 細菌ワクチンの研究から始まった粘膜免疫学の創生と経口・経鼻ワクチンの開発



左から、加納博文先進科学センター長、横手幸太郎学長、清野卓越教授、大栗教授、大島精司医学部附属病院長



両陛下が見守られる中、賞を受ける大栗教授(左)、清野卓越教授(右)

OBOG MESSAGE

日本一笑顔の集まるベーカリーを目指して 株式会社ピーターパン 山本 美紗子さん

入社のきっかけ

在学中に、ゼミの先輩が就職したベーカリーに興味を湧き、船橋のお店を初めて訪れたのがきっかけです。ログハウス調のかわいい外観の店内に入ると、次々に焼き立てパンがお店に並べられ、働いているスタッフもお客様も楽しそうで心が躍り、テラスで焼き立てのパンを食べた時にそのおいしさに感動しました。こんな素敵な空間で働いてみたいと思い、会社説明会に参加しました。パン作りだけでなく会社の運営、経営にも携われるということがわかり、その点に魅力を感じ入社を決めました。

仕事の紹介 ～世界記録に挑戦！～

これまで、二度の産休・育休を取得しながら、イベントの企画運営、新商品開発、採用や教育、マネジメントなどの店舗運営など、様々な



山本 美紗子(やまもと・みさこ) 製造部調理課 小麦の丘店調理キャップ 2006年 文学部 国際言語文化学科 卒業

仕事に携わってきました。中でも印象に残っているのは、2015年に看板商品である「元気印のメロンパン」の一日の販売個数が世界記録に挑戦したことです。記録認定のためには厳しい基準があるのですが、運営責任者として半年以上かけて入念に計画・準備をしてついに記録を達成！仲間と喜び合い、大きな充実感を得ることができました。

学生へのメッセージ

当社では自分の仕事がお客様のお役に立てている、と実感できる場面がたくさんあります。直接ありがとうと言ってももらえることは毎日の仕事のやりがいにつながります。地域に根差した当社でぜひ一緒に働いてみませんか？



山本さんのほかにも千葉大学卒業生が活躍中 法経学部 総合政策学科卒(左)、理学部 地球科学科卒(右)

株式会社ピーターパン
<https://peaterpan.com/>

毎日の暮らしに「ちょっと賢沢、ちょっとおしゃれな食文化」を提供



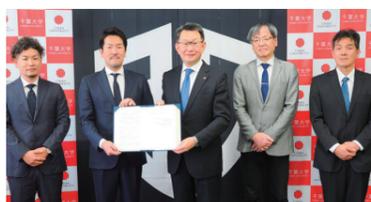
千葉県に10店舗展開。テレビ「カンブリア宮殿」でも『地域住民の幸せを膨らませる奇跡のパン屋』と紹介されたビジネスモデルから生まれる価値は、パン屋の枠にとどまりません。パンを通して笑顔が広がりテラスにはコミュニティが生まれます。憩いの空間は街のシンボルに。



INFORMATION

株式会社アルティールと 連携協定を締結

千葉大学は、プロバスケットボールクラブ「アルティール千葉」を運営する株式会社アルティールと、スポーツおよび教育の発展を通じた地域振興を推進することを目的として、2024年6月3日付けで連携協定を締結しました。今後、幅広い分野で緊密な協力



左から、株式会社アルティール飯村洋平取締役・新居住英代表取締役、横手幸太郎学長・小澤弘明理事(教育・国際担当)・下永田修二教授(教育学部)

関係を築き、将来を担う若者の向学心を育成する活動や、地域コミュニティの活力および一体感を醸成するような取り組みを、より一層推進していきます。

EVENT

医学部・病院創立150周年 記念式典を開催

7月20日、「千葉大学医学部・病院創立150周年記念式典」を開催し、熊谷俊人千葉県知事をはじめ、224名の方にご参集いただきました。三木隆司大学院医学研究院院長は、関係者の方へ謝辞を述べるとともに、「今後さらなる飛躍によって、教職員一同、一層努力していきたい」と決意を語りました。式典後は、筑波大学国際



多くの来場者であふれる、病院の「ガーネットホール」

統合睡眠医学研究機構(IIIS)機構長の柳沢正史氏による学術講演会、ピアニストの西川悟平氏による文化講演会が行われました。

AWARD

千葉大生が環境に配慮した 納豆向け容器をデザイン

千葉大学工学部の学生らが、納豆向け折り畳み紙パック容器をデザインしました。折り紙から着想を得た一枚の紙からできた独自の展開構造が特徴であり、納豆による手の汚れを防ぎ、プラスチックを使用しないことで環境への負担も軽減した容器です。

この容器のデザインは、「グッドデザイン・ニューホープ賞」(日本デザイン振興会主催)と「日本パッケージデザイン学生賞」(日本パッケージデザイン協会主催)に入選しました。



納豆向け容器をデザインした工学部の学生と田内隆利准教授

もっと 知りたい 千葉大学

千葉師範学校 最初の修学旅行

千葉師範学校(現・教育学部)の最初の修学旅行は、1888年に実施された房総半島を徒歩で一週する企画でした。全行程は二週間で、道々、動植物採集や学校参観をしましたが、街場に入ると、軍人と同様の衣服を来た学生が、先頭のラツパに合わせ行進をしたそうです。一方、県外に出たのは1890年からで、上野の内国勲業博覧会見学を主目的に、一週間かけ市内の学校見学などもしました。(大学院国際学術研究院 見城悌治)



1897年に亥鼻に移った校舎の全景



ニシ

秋といえば芸術の秋。油絵を描いてみたいな〜。



イノ

秋といえばスポーツの秋。もっと高くとべるように鍛えなきゃ。



マツ

秋といえば行業の秋。紅葉がきれいなところに行きたいな。



スミ

秋といえば読書の秋。目標は100冊よむこと!

CHIBA TOMO とは…

千葉大学のキャンパスをかたどったマスコット。うさぎの「ニシ」、かもめの「イノ」、さいの「マツ」、バクの「スミ」です。

たくさんのご寄付や応援メッセージをありがとうございます!

卒業生、保護者の方々、その他学内外の皆様からたくさんのご寄付を賜りました。心よりお礼申し上げます。
千葉大学は、学生が学業に専念できるよう、これからもサポートしてまいります。

令和5年度の
寄付実績

寄付件数 **2,508** 件

寄付総額 **3億7,727万** 円

ご支援を受けた学生からのお礼のメッセージを紹介します。

看護学研究科 博士後期課程修了 北川 柚香さん

長期にわたって療養をする必要があるにも関わらず、いまだ治療法が確立していない希少な疾病が複数存在します。そのような疾患の方々について、その原因の特定や治療法の発見が求められているだけでなく、疾患をもって生きる個人個人が豊かに過ごせるよう、看護学的アプローチの開発が求められます。私は足の傷がしやすい疾患について、傷の予防や傷ができてもしっかりと生活する方法の検討を行ってきました。

COVID-19の影響下、看護、医学に関する研究を行う私たちは、複数の制限を余儀なくされました。遠方にお住まいの対象者様の調査や学会参加に関しても、ご支援がなければ実現しなかったことと思っています。看護師であり院生である私が修了まで至れたのは、他ならぬご支援のおかげだと思っています。皆様からいただいた温かいご支援に深謝申し上げます。

これまでの研究成果について、学会では優秀演題賞をいただくなど、成果の発信を始めておりますが、国際誌への学術論文の掲載を目標に、整理や再分析を行っていきたくと存じます。修了後は、看護師養成教育に携わることとなりました。生活の質に直結する足のトラブルについて対処できる看護師を育てられるよう、専門性を持った看護研究者としての役割を果たしていきたいと思っています。



▲ 第4回日本フットケア・足病医学会学術集會にて優秀演題賞を受賞したときの様子

学生からのお礼のメッセージ
(動画)



千葉大学創立75周年記念式典・陸上競技場オープニングイベント開催

千葉大学は、千葉医科大学や千葉師範学校などを前身として、昭和24年に5学部から成る新制国立大学としてスタートし、今年創立75周年を迎えます。その記念事業として陸上競技場の改修工事を進めており、卒業生や地域の企業など、千葉大学を応援して下さる皆様からのご支援をもって、完成いたしました。完成を記念し右記日程において、創立75周年記念式典および陸上競技場オープニングイベントを開催いたします。



▲ 陸上グラウンドの改修状況(R6.9.30現在)

令和6年11月2日(土)

第1部 陸上競技場 オープニングイベント

ゲストにオリンピックの為末大氏をお招きし、参加型イベントを実施。

第2部 創立75周年 記念講演会

第114回日本学士院賞を受賞した、大栗真宗教授・清野宏卓教授の記念講演を開催。

税制上の優遇措置

個人

寄付金が2,000円を超える場合は、確定申告を行うことにより税制上の優遇措置を受けることができます。

法人

全学損金算入が可能です。

お問い合わせ先 **千葉大学基金室**

メール kikin@office.chiba-u.jp

043-290-2014

ホームページ <https://kikin.chiba-u.ac.jp>

千葉大学基金

ご不明な点がございましたら、遠慮なくお問い合わせください。

住所 〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33





CHIBA UNIVERSITY

75 year anniversary

1949 - 2024

INDEX VOL.65

02 千葉大スタートアップ・ラボの取り組み

2022年にIMO内に設置された「千葉大スタートアップ・ラボ」。在学中から起業に興味を持つ学生にとって強力なサポートとなること間違いなしの、新たな取り組みを紹介します。



06 千葉大学 OBOG インタビュー

箱根芦ノ湖で運行されているユニークな遊覧船をデザインしたOBが登場！「モビリティデザイン」というジャンルだけにとられない、仕事に対する心構えなどを伺いました。



08 研究紹介 -InfoGraphics- CHIBADAI NEXT より

今回から誌面をリニューアル。ドローンをつかった最先端の農業に取り組む濱助教の研究を紹介します。
—千葉大学 大学院園芸学研究院 助教—



09 TOPICS / もっと知りたい千葉大学 / CHIBATOMO ものがたり

ちばだい
プレス CHIBADAI
PRESS
千葉大学
広報誌



web版はこちら

[表紙] 片桐 大輔 (かたぎり・だいすけ)

大学院国際学術研究院 教授
千葉大スタートアップ・ラボ責任者



千葉大スタートアップ・ラボは、責任者の片桐教授、5名のURA(イノベーション・マネジメント研究員)、4名のEIR(客員起業家)で構成されています。今回の特集には、片桐教授・小川EIR、学生起業家の関さん、大澤さんにご登場いただき、スタートアップ・ラボの概要から実際の取り組みについて、体験談を交えて語っていただきました。

(撮影:西千葉キャンパス IMO棟)

編集・発行 / 千葉大学 広報室

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1番33号

TEL: 043-251-1111(代表) E-mail: koho-hp@office.chiba-u.jp

ご意見・ご感想をお寄せください

www.chiba-u.ac.jp